

バルセロナ日本人学校運動会における表現活動(剣道)の実践と成果

佐藤 宏則¹⁾

I はじめに

現在は、グローバル社会が進み、異なる文化や価値観を受け入れ、新たな関係性を創造する「多文化共生」の考えが一層高まっている。バルセロナ日本人学校中学部では、運動会において表現活動として剣道を実施している。運動会では、多くの現地校や補習校に通う児童生徒や保護者が参観しているため、剣道を通して日本の文化を伝える貴重な場となっている。本稿は、この表現活動(剣道)に至るまでの体育授業の実践報告を目的とする。

バルセロナ日本人学校は、1986年に創立され、運動会では表現活動として慣例的に剣道を行っている。伝統ある本校は、在外教育施設のため、保健体育科は派遣教員が指導を行っている。過去に赴任した保健体育科教員の中では、剣道有段者(4・5段)や経験者が派遣されていた。しかし、派遣された保健体育科教員が全て剣道経験者ばかりではなかったことも事実である。

21年間剣道を継続して行ってきた筆者であっても、運動会で表現することに対し、非常に抵抗があった。まず「何を表現するのか」という問題があった。我々は、礼法に始まり、構え方、足の運び、竹刀操作、防具の着装、打ち込み、試合に至る、明治期以来の古式ゆかしい「稽古」の風景を表現することが求められているのだろうか。この問題は、今まで派遣されてきた保健体育科教員、とりわけ「武道を専門としない」教員(以下、非専門教員)にとっては、実施内容如何では教科の専門家としてのアイデンティティを揺るがすほどの問題となるのではないか。その不安は的中し、筆者が赴任前に非専門教員が指導

した表現活動(剣道)の動画を確認したところ、その映像の生徒の動きから明らかに「形骸的な剣道」が見て取れた。そこには、非専門教員が表現活動に向けて過去の目に見える動きだけを参考にし、学習内容が明確とされていない「形骸的な剣道」が映し出されていた。剣道に内在する運動文化と歴史的・教育的価値を後世へと伝える上でも、授業で「何を学んだのか」を明らかにしなければならない。本稿はその一試論となるが、同時に非専門教員が剣道の表現活動を指導する上で生じる問題を解消するためのそれであることも追記したい。

II 平成28年度実践報告

平成28年度第31回運動会中学部の表現活動(剣道)に向けて実際に行った体育授業は表1のごとく展開された。この授業は、スポーツ運動学的アプローチにより、剣道に用いられる動きのコツやカンの身体知を獲得することを学習内容の中核とした。また、学習目標を達成するために教材教具の工夫と指導者と生徒の相互作用を心がけ、生徒たちの運動感覚などを表現できるようにした。

1時間目の授業で、剣道に対する生徒の実態を把握するためのアンケートを実施すると、興味深い結果を得ることができた。アンケート結果から、生徒たちは剣道の精神面の神秘性や凛とした雰囲気、そして礼儀正しさといった日本の伝統文化的な要素である「効果的特性」に興味、関心が優位であることが確認された。

これは、山神(2005)が紹介するフィンランドにおける剣道初心者の特性感受の方向性という指

1) バルセロナ日本人学校(国内所属機関：神奈川県大和市光丘中学校)

表1 単元計画

時数	学習活動
1	アンケート オリエンテーション ビデオ導入 礼儀作法
2	すり足鬼ごっこ 日本刀・木刀・竹刀の説明 素振り (面・小手)
3	タン・タ・ターンの踏み込み動作 素振り 竹刀で受けての面打ち
4	新聞斬り
5	新聞斬り 素振り (面・小手・胴)
6	切り返し
7	防具の着装 (胴 小手) 切り返し
8	防具の着装 (胴 垂 小手) 切り返し 胴の切り返し 引き技 (引き胴)
9	防具の着装 (胴 垂 小手) 切り返し 胴の切り返し 引き技 (引き胴)
10	道着・袴・防具の着装 (胴 垂 小手)
11	紅白グループに分かれ 表現内容を考え実践
12	紅白グループに分かれ 表現内容を考え実践
13	第1回リハーサル
14	第2回リハーサル
15	最終リハーサル

摘と同型であった。日本の剣道の授業では、剣道の特性に対する生徒の感じ方が、長期にわたって剣の修練を積み、剣道の楽しさを知り、それが原動力になってさらなる修練と上達につながり、手ごたえを感じてはじめて、理合いや礼儀など剣道の心の部分を理解する傾向が強い。

日本が「機能的特性 (喜びや楽しさ)」、 「構造的特性 (技能体系)」、 「効果的特性 (心身への影響)」といった流れで深化するのが特徴的なのに対し、フィンランドの人々が剣道始める理由の多くは、「効果的特性」、次に「構造的特性」そして「機能的特性」と剣道 の精神面の神秘性や凛とした雰囲気、そして礼儀正しさといった日本の伝

統文化的な要素 (効果的特性) というように逆の順を辿る。この日本の伝統文化としての剣道に魅せられ、人間教育としての価値に共感し、剣道を実践しようとする人々がフィンランドには多いという。このアンケート結果も、海外に住む生徒たちの、日本人らしさを求める海外ならではのと考えられる。また、脈々と受け継がれている表現活動 (剣道) が伝統として価値付けられていることも要因であろう。

授業者でもある筆者が、目の前にいる生徒に強く伝えたいことが、まさに「効果的特性」であったことは言うまでもない。「勝った・負けた」の結果を重視した剣道ではなく、剣道の有する特性を総合的に学習する「まるごと学習」を意図していた。それは、剣道独特の凛とした雰囲気や礼儀作法、気持ちや呼吸を整え対面したパートナーと心を合わせることの大切さを実感し、他者がいてこそ自己認識をすることができる様子を表現したいからである。

単元の2時間目から5時間目には、すり足鬼ごっこ (すり足をしながら手刀で構えて「ヤー」と発声しながら鬼が追いかけて、タッチの瞬間「メーン」と発声するゲーム) や「タン・タ・ターン」と踏み込み動作 (初めは1人で行うが、次に手をつないで2人、そして全員と行う。) のリズムを動感言語 (擬音語・擬態語) で表し、単調な動作である「すり足」と「踏み込み動作」にゲーム性とリズムを取り入れることにより、「楽しみながら取り組める」「仲間とリズムを合わせることで、一体感を味わえる」ことをねらいとした。このように理解を促進した活動や、新聞斬り (2人1組になり、1人が新聞を両手で持ち、それをもう1人が竹刀で斬る) を行った。これは学習内容を明確化し動きのコツ・カンを獲得させるべく実施した。剣道において必要な運動感覚能力を身に付けることは容易ではない。しかしながら、動きの獲得に授業時間を費やしては、表現活動を実施することができない。そのため、剣道において必要な運動感覚能力を効果的に形成するために「類似した運動 (アナラゴン)」を下位教材として取り入れた。

このように授業の展開を工夫し、動きの要であ

るコツの獲得、すなわち「身体の動かし方を自分でわかること(三木, 2005)」で、剣道において必要な運動感覚能力として遠近感能力(近さや遠さ、狭さや広がり、時間的な短さや長さを感じとる)、予感化能力(何かことが起こりそうだと感じる)といった始原身体知の体感・時間化身体知や、カンとしての付帯伸張化能力(身体知が身につけた手具に伸びていく)の獲得をめざした(金子, 2005)。

4時間目におこなった新聞斬りでは、授業者と生徒の相互作用を意識した。多くの場合、生徒たちは「どうしたら出来るのか」知りたいために、授業者に頼り、「コツ」を尋ねてくる。実際に、新聞斬りを実施すると、生徒たちは「コツはありますか」と質問してきた。授業者は、上手に斬れた生徒に「上手く斬れた人は、どのような感じだったであろうか」と発問すると「竹刀が新聞に当たる瞬間に手首に力を入れ、太鼓をバチで叩くようにすると良い音を立てて斬れた」と答えた。この「太鼓をバチで叩くようにする」というアドバイスで、多くの生徒は、手首の使い方が特段に向上した。本校は、幼稚部・小学部・中学部が併設であり、小学部5・6年時の音楽の授業では、和太鼓を本格的に学んでいる。そのため、「太鼓のいい音」を出すためのバチの使い方と竹刀の使い方が酷似しているということに気が付いた。生徒は、「本当だ！太鼓と一緒にだ」「やった！斬れた！」など仲間のコツを利用して上手に新聞を斬ることができるようになった。生徒たちの内省報告(自分のコツ)には、多くの技術ポイントが隠されており、それを生徒同士が感覚的に共振することで学び合いが成立した。この新聞斬りの授業では、「私のコツ」が「私たちのコツ」になり、授業の最後に全員が新聞を斬れるようになったとき「仲間のコツ」へと発展し共有された。

6時間目から10時間目は、切り返し、防具・道着・袴の学習・着脱を学習した。道着に身をまとい、襟元を正し、袴の紐を締めると皆、自然と晴れ舞台に立つ剣士に生まれ変わる。そして防具を付け、正座に静座と展開することで、より剣道らしさが増していった。

11時間目から15時間目は、今まで学習してき

たことを紅白の2グループに分かれてグループ学習を行った。表現活動の内容は、前半は筆者が提案し、後半は各グループで話し合い構成した。紅グループは、切り返しの動作を発展させ、鏝競り合いの状況になり、かかり手が基立ちの逆胴をダイナミックに打つという表現を考案した。また、白グループは、胴の切り返しの動きを採用した。胴打ちは、竹刀が胴に当たる瞬間に音が鳴るため、生徒たちは気合と打突の音によるダイナミックさを表現したいと意図していた。そして、最後のクライマックスの場面は全員でVの字の隊列を組み、正面に向かって跳躍素振りを行い、一体感と剣道の格好良さを表現した。

本番当日は、グラウンドを素足で表現するため、踏み込み動作を行うことが安全上実施することができなかった、すり足・手首を使った冴えのある打突・気合を込めた有効打突と全ての特性が身体に形成された様子で表現することができた。そして全授業で教えていた「礼に始まり、礼をもって行い、礼に終わる」の徹底を表すために、全員莫塵の上に正座し座礼から始まり、礼をもって各表現を行い、最後、座礼をして終わることができた。

Ⅲ まとめ

本稿は、スポーツ運動学的アプローチにより、剣道に用いられる動きのコツやカンの身体知を獲得することを学習内容の中核とした体育授業を報告することを目的とした。当該報告は、多くの体育授業で行われる剣道や熟達した剣道家から見ると、技能の習熟度が非常に低い剣道であると見受けられよう。しかし、バルセロナ日本人学校おいて行われるべき剣道の授業とは、先にあげたような実践が「伝統的な行動の仕方」、「伝統的な考え」を継承するために有効であると考えている。

本来相手を攻撃する暴力、あるいは護身のために行われてきた武術が、安全に練習や試合ができるための用具の開発やルールを考案を通して、平和な社会においても競い合うことができるようになったもので、相手に危害をあたえないからこそ、その技の在り方や行動様式に「道」としての様々な思いや願いを込めつつ発展してきている運

動文化であるということを生徒に伝える有効な手段である。

たしかに、技能的には現代剣道の基本動作を単元の最初からは指導してきていないため、未熟なままの生徒が多い。しかし、自ら考えてきた技や一本の条件を意識し、剣道の表現を生徒なりに楽しむことができるということは剣道を通して学ぶべき内容を修得していると考ええる。

非専門教員のための参考資料(過去の動画など)は、その受け止め方を間違えると方法論で終始してしまう恐れがある。そのため、授業では構造的特性が重視され、相手に打突をしなければ、剣道の学習内容を得られないと考えている。しかしながら、学習内容を明確にすることで、「間合い」「緊張感」「心を通わす」「伝統的な考え方」

などを味わうことができる。剣道の授業は、単に「竹刀の振り方を教える」時間ではないことを強調したい。指導力の向上は、参考資料(過去の動画など)のみで補完されることはなく、常に授業・教材研究と反省を蓄積することに尽きるだろう。筆者も保健体育科の教員のexpertとして、また、剣道家として今後も研究を重ねていく所存である。

文 献

- 三木四郎(2005)新しい体育授業の運動学. 明和出版. 163.
山神眞一(2005)剣道の授業で学んでほしいこと. 体育科教育53(11). 28-31.
金子明友(2005)身体知の形成(下). 明和出版. 2-46.